αMプロジェクト2020-2021

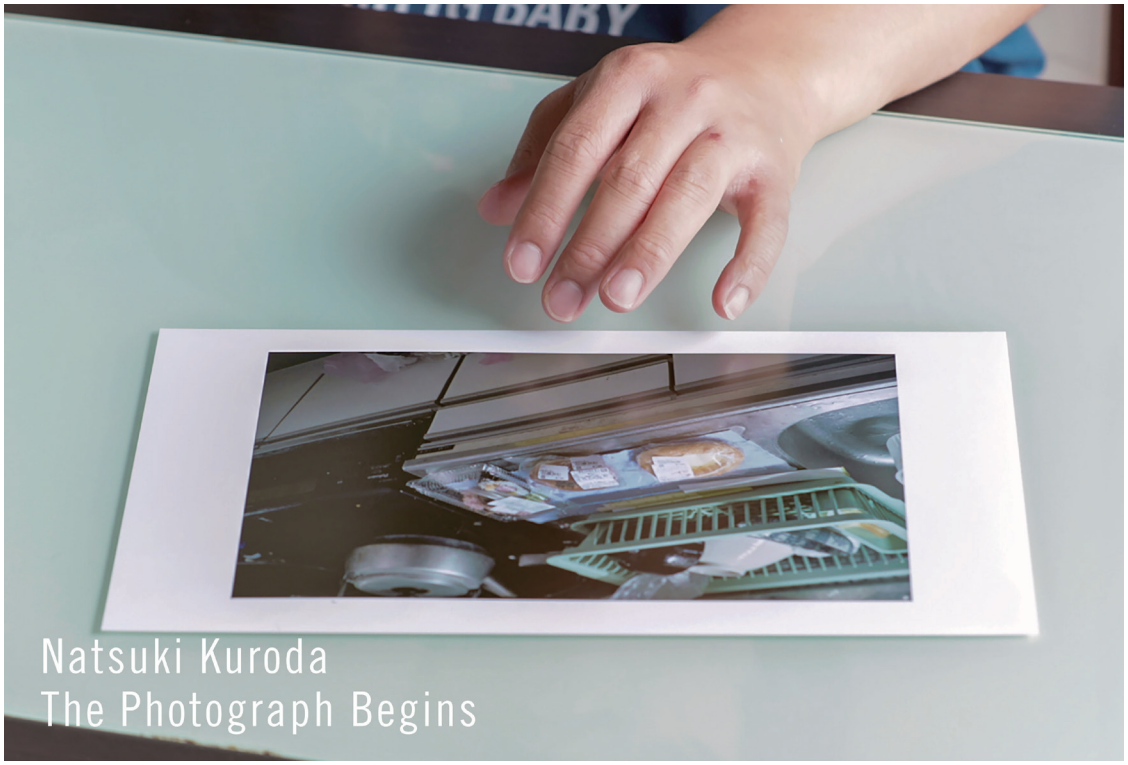
約束の凝集
Halfway Happy

vol. 3　黒田菜月 | 写真が始まる
vol. 3 Natsuki Kuroda: The Photograph Begins

ゲストキュレーター：長谷川新（インディペンデントキュレーター）
Guest Curator: Arata Hasegawa (Independent Curator)

2021年3月16日（火）〜6月5日（土）※オープニングパーティ等はございません。
13:00〜20:00　日月祝休　入場無料

会場：gallery αM
〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11アガタ竹澤ビルB1F
tel：03-5829-9109　fax：03-5829-9166
https://gallery-alpham.com



※新型コロナウイルスの影響により、開催日時の変更や入場制限、ご連絡先の記入等へのご協力をお願いする場合がございます。
ご来廊の際には、必ずマスクをご着用いただき、体調の優れない方はご来廊をお控えくださいますようお願い申し上げます。最新情報は、Webサイト、SNS等をご確認ください。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。■
gallery αM ギャラリーアルファエム　e-mail: alpham@musabi.ac.jp ／ tel：03-5829-9109 ／ fax：03-5829-9166
武蔵野美術大学 大学企画グループ 社会連携チーム（ギャラリー不在時）　tel：042-342-7945 ／ fax：042-342-6087

αM プロジェクト 2020–2021「約束の凝集」第 3 回は黒田菜月の個展「写真が始まる」である。本展ではふたつの映像《友だちの写真》と《部屋の写真》を上映する。《部屋の写真》については入れ替え制をとるため、鑑賞者の方々は会場を待合室のように利用していただければ嬉しい。それぞれ 30 分弱の映像作品である。

黒田菜月は写真家であり、作品のタイトルにはいずれも「写真」という語がつけられている。会場にはいくつかの写真が額装されているはずだが、展示しているというよりは、待合室にそれとなく佇んでいる風景の一部、という性質が強い。メインとなるのは、あくまでもふたつの映像である。ここにまずツイストがかかっている。写真と名づけられた映像。

だがこのねじれは鑑賞すればすぐにほどけていくと思う。《友だちの写真》も《部屋の写真》も、写真が重要な道具立てとなっている。《友だちの写真》では動物園で子どもたちがふたつのチームに分かれて写真を撮り、手紙を書くが、それぞれのチームの子どもたちが顔を合わせることはない。《部屋の写真》も、黒田が撮影した写真をもとに介護者が言葉を重ねていくが、聞き手である私たちがその部屋の住人を眼にすることはない。写真を通り抜けることでしか、より正確に言えば、写真について語る言葉をたどり直してみることでしか凝視できない人間がいる。写真を形容する二分法として引き合いに出される「鏡と窓」の比喩で言えば、そのどちらでもない写真の現れ方がある。鏡でも窓でもなく、ざらついた壁としての写真。打ちっぱなしのコンクリートのように、それ自体は何も語らず、とても冷たい。「隣りあう独房にいるふたりの囚徒は、壁を叩いて意志を伝えあう。」「鏡と窓」にかえて、ヴェイユの言葉を口にしてみる。「壁はふたりを隔てるが、意志の疎通を可能にもする。」（シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』冨原眞弓訳、岩波文庫、2017 年、p.250）

写真をめぐる実践には絶えず「撮る／撮られる」「見る／見られる」の関係があり、その非対称な構造ゆえに権力と暴力の問題が必然的に発生する。この事実に向き合うことが誠実であることは論を俟たないし、具体的に傷つく人が存在していることは見過ごされてはならない。そのうえで、黒田は、写真のもつ暴力性への自覚の誇示とは異なることに自身の技術を使役させる。黒田はその暴力性の前で態度を保留しない。一緒に悩んで欲しいというようなメタメッセージも有していない。黒田の放つメッセージはどこまでもクリアだ。それは、写真はあっていい、という鮮烈な提案である。写真を観て、言葉にすることは楽しい。

実在する一枚のモノクロ写真から長大で複雑な小説を書き上げたリチャード・パワーズのように、写真を起点に想像力を爆発させるのも最高ではあるのだが、本展で営まれているのは、どちらかと言えば、写真から言葉に、言葉からまた写真に戻りつつ、ミニマムな翻訳を繰り返していくような実践である。どちらの映像にも、「写真はこんなにもまだ観ることができるのか」と目が醒めるような手応えがあり、自分がおそらく出会うことのない誰かにとっても写真が始まったと信じられる経験がある。なお、黒田が《部屋の写真》にとりかかったのは 2017 年頃からであり、したがって制作の時系列としては《友だちの写真》よりも先となっている。

長谷川新（インディペンデントキュレーター）

友だちの写真
2018 年（2021 年）
25 分

2018 年 5 月に、黒田は横浜市立金沢動物園で子どもたちを対象としたワークショップをおこなった。子どもたちは写真を使って問題をつくる「問題チーム」と、その問題を解く「推理チーム」の 2 班に分かれて動物園を歩き回る。お互いが顔を合わせることのないなかで、写真を通してどのようなやりとりが行われるのか。

本作品は、2018 年の 12 月にギャラリー OGU MAG にて 3 日間限定で公開されたものを本展用に一部再編集したものである。

部屋の写真
2021 年
28 分

黒田は 2017 年頃から断続的に介護の現場の人々の撮影やインタビューを重ねてきた。介護者に手渡される写真は、かつて介護者自身が介護をおこなっていた人の部屋の写真である。彼ら、彼女たちがその写真から何を見つけ、何を思い出し、どのように自分に引き寄せて言葉にしていくか。写真を観て語るその時間に、黒田は同行する。

本展の映像作品は 30 分ごとに交互に上映いたします。
毎時 00 分より《友だちの写真》
毎時 30 分より《部屋の写真》
※《部屋の写真》は、入れ替え制となります。

●黒田菜月(くろだ・なつき)
1988年神奈川県生まれ。2011年中央大学卒業。2013年第8回写真「1_WALL」にてグランプリを受賞。主な展覧会に、「けはいをひめてる」ガーディアン・ガーデン(東京、2014)、「わたしの腕を掴む人」ニコンサロン(東京、大阪、2017)、「友だちの写真」ギャラリーOGU MAG(東京、2018)などがある。また、2016年からは横浜市立金沢動物園にて毎年行われているメディアアート展「ひかるどうぶつえん」に参加。2019年には同園にて写真と映像のグループ展「どうぶつえんの目」横浜市立金沢動物園(神奈川)を企画した。

キュレーターズノート (2020.1.16)　長谷川新

2018年の暮れ、「αMでゲストキュレーターをしませんか」と連絡をうけて最初に考えたことは、「絶滅」についての展覧会だった。風の谷のナウシカの原作漫画を繰り返し読んでいて、タイトルは仮で「ノーマンズランド」とつけていた。それはとても暗いように見えるけれど、別に悲観的であるわけではなくて、むしろそれを避けてアートはできないんじゃないか、という中途半端にリアルな手応えに基づいたものだった。他方で、できるだけ具体的であろうとも考えていて、開場時間を13時〜20時へと変更したり、初日のアーティストトーク(とその文字起こし)をやめてカタログをもっといろんな読み方ができるようにしようとか、オリンピックシーズンの鑑賞／労働条件を鑑みて、展示はせずに別の時間の使い方ができるようにしよう、と決めたりもしていた。このちぐはぐさはなんなのだろう、と自分でもよくわからなかった。でもいまははっきり書けることがある。

各位が培ってきた技術は、「妥協」のために、つまりは部分的であったり矮小化されて行使されるべきではない。アートは、「アートなんて無意味だ」とか「どうせいつか死ぬ」とかいう地点にたどり着いてしまってから、むしろそこから、そこをどう折り返して、還ってくるか、という、いわば「帰還の技術」の連続である。虚無と相対化の荒野は、到達地点であったとしても、目的地では決してない。無意味かもしれない、けど、やりたいんだ、と踵を返す。

妥協を「約束の凝集(Com-Promise)」として、途方もなく前向きに考える。それが妥協ではなく約束の凝集である限り、そこには未来の時間が含まれている。今回のαMは、5人のアーティストが、自分が生きて死ぬ時代に、それぞれのやり方で、未来を確信する技術の、研鑽と共有です。

追記(2020.7.29)
半年前のキュレーターズノートを見返すと隔世の感があります(恥ずかしいですがそのまま再掲します)。それでも、「はっきり書ける」と書いた部分はいまでもはっきり書けます。「約束の凝集」には、確信もあれば、矛盾もあります。アーティストの実践は社会と同じくらい複雑だし、社会はアートと同じくらい吹っ切れている。そういう潔さを心がけたい。でもそれ自体を見せたいわけじゃなく、問われているのはあくまで、どう還ってくるか、です。5人のアーティストの「帰還の技術」を目撃しにきてください。